

● 優秀賞

こころを育てる保育授業の工夫

～たまごは私たちのあかちゃん～

広島県東広島市立黒瀬中学校 はやしま なみ
林真奈美

1 はじめに

子どもたちを取り巻く社会環境の変化によって、人やものに対する愛情が薄らいで来ているように感じる。また、衣食住に関する自分の生活を親の手を借りないとできない中学生も多くなってきた。「共生と自立（自律）する力」が低下してきているように感じる。家庭での教育力の低下もいわれているが、我々学校現場がしっかりしなければならない。家庭科教育が育む「生きる力」を子どもたちにつけようとする、実践的・体験的な学習活動を中心とした授業実践が必要になる。しかし今回の改訂で、家庭科の授業時間が削減され、教師は教科書を中心とした講義形式の授業を行ってしまいがちである。

「命の尊さ」を扱うことのできる「保育」の授業の中で、授業時数を減らすことなく、より効果的で、実践的・体験的な学習教材の開発について研究した。また、家庭分野B「家族と家庭生活」で取り上げる内容について、指導要領の記述（下の囲み）からこれら3項目の内容を総合的に学習できる教材の開発に取り組んだ。

- (1) 自分の成長と家族や家庭生活とのかわりについて考えさせる。
- (2) 幼児の発達と家族について、次の事項を指導する。
- (3) 家庭と家族関係について、次の事項を指導する。

2 研究の構想

これまでの「保育」では幼稚園や保育所での幼児観察を中心とした幼児との交流会を行うことが主流であり、幼児の発達段階や子どもの遊びの種類や遊び方、友だちや大人とのかわり方などに気づかせてきた。これらの学習は幼児理解を机上の理論のみで終わらせない学習方法としてこれまで効果をあげてきているが、それらをどれほど理解できているのか、教師側からは把握しにくい。

家庭科では、生活場面や生活実態に即した学習方法が求められなければならない。生活設計の学習では、「家族」学習での家族員の役割理解の学習にロールプレイングが多く用いられている。今回は発展的に次の段階へと進めるための手だてとして、シュミレーションによる学習活動をしくんだ。これは、家庭や家族の基本的な機能について理解させると共に家族関係をよりよくする方法として有効であろう。

以上の構想をもとに生のたまごを親役になった子どもたちが、学校の家庭科室を保育所として送迎をし、1週間「育児」を行う活動である。

本教材の効果については事後アンケート及び生徒の感想より測定する。

3 実践例

(1) 題材

「たまごの育児」
-たまごは私たちのあかちゃん-

〔概略〕

生のたまごを子どもに見立てて顔を描き、お父さん役・お母さん役の生徒が協力して、1週間を4年間として育てていく。学校に登校し教室に入る前に家庭科室に設定した「保育所」に子どもを預ける。放課後帰宅する前に保育士から子どもを受け取りに行く。自宅へは牛乳パックで作ったキャリーバックに入れて連れて帰り、育児日誌を書く。

(2) 授業実施学年

中学2学年

中学校3年間の中で1番自他共に傷つけ合うことの多いこの学年で行うこととした。

(3) 授業実施期間

11月9日～16日まで1週間

(4) 授業の内容

ア ペア同士で、母親と父親の役割をする

「赤い糸」を利用して偶然性によるペア作りや、クラスで事前に決まっていた生活班でのペアを活用することにした。

イ 被服室を「保育所」とする

生徒は学校を職場として働きに来ていると想定しているため「保育所」と設定し、幼児を取り巻く環境としての施設について事前学習をする。

ウ 保育所の保育士になる生徒の希望を募る

育児日誌へ保育園での生活を記入したり、親に保育園での生活について連絡をする仕事である。男女がペアになることにどうしても抵抗感がある生徒の受け入れとしても設定した。

エ 父親・母親の送迎分担を決める

学校で学習する時間を労働時間とし、フルタイムでの仕事を夫婦が持つとか、幼児の送迎に必要な時間的な条件を2人で話し合って設定する。生徒によっては学校の帰りに塾に行く日があり、たまごを持って帰れない時は残業があると仮定して、男女での送迎分担の曜日を決める。

オ あかちゃんの名前を決める

自分の未来の赤ちゃんを想像しながら、名前を決定させる。お互いの意見を聞き合い、譲り合いながらかかわりあうことで、ひとつの名前に決めさせ、その名前の由来を記入させる。

育児日誌より

〔 樹 〕 いつき

大樹のように大きく人の心を和ませてくれるような、たくましく優しい人になってほしい。

〔 宇宙 〕 そら

「宇宙」という字のとおり、宇宙のように大きく広い心を持った子で、宇宙のようにキレイな子に育って欲しいということでこの名前をつけました。あと、そらっという名前の響きがいいからです。

ペアで楽しそうに話し合い、名前を決めるには随分時間がかけられていた。

カ 産婦人科に夫婦揃ってあかちゃんを受け取りに行く

(他の教師とのT・Tによる授業)
T2に産婦人科の先生になってもらい、実際の医者のように白衣を着て、受け取りに来た生徒にはお祝いの言葉とともにたまごを渡す。



●写真1／産婦人科の先生

キ 牛乳パックで送迎用のキャリーバックを作る

〔作り方〕

保育園のベビーベットの作る

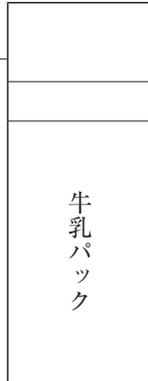
牛乳パックの上をテープで止めて5cm切り取る。

取っ手を作る

2cm切り取る。

取っ手を止める

下半分の牛乳パックへ取っ手を止め付ける。



●写真2／工夫されたキャリーバック

ク 1週間の育児をする

〔登園時間〕

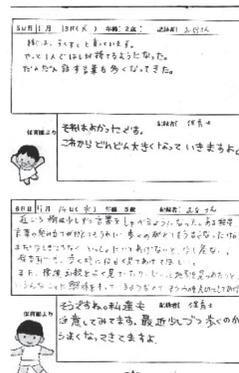
8：15～8：25分（朝のH.R8：30～）

〔降園時間〕

4：00～4：15分（帰りのH.R～4：00）



●写真3／男女協力して製作中



●写真4／保育日誌

〔保育士の仕事内容〕

- 壊れないように、必ず保育士の手であかちゃんの受け渡しをする。
- 朝は出席簿に欠席と遅刻の記録をする。
幼児の園での生活の様子を記録したり、親の記入に対しての感想や意見を述べる。
- 教師は園長としての立場で日誌に記入する。

〔保育期間〕

- 1日目……………誕生
- 2日目……………3ヶ月
- 3日目……………6ヶ月
- 4日目……………1歳
- 5日目……………2歳
- 6日目……………3歳
- 7日目……………4歳



●写真5/私のおかちゃん

(5)「たまごの育児を終えて」生徒感想

(お母さん役)

私は最初はとても「たまご」を「子ども」と思って育てることがイヤでした。でもたまごを自分の赤ちゃんだと思い、育ててみると本当に産まれたときは、すごく楽しいんだろうな。毎日、いろんなことがあるんだろうなと思い始め、たまごを育てるのもだんだん楽しくなってきました。

人間を育てるとするのはとても難しく、責任があることだと思いました。

(お父さん)

卵の育児というのを初めて聞いたとき『たまごを子どもと見るなんて無理』と後ろ向きなことを考えました。泣かないし、話さないし、食べないし、愛情を持って送り迎えなんて無理だと思った。でも3日目ぐらいから送り迎えだけでも大変に思えてきた。保育所が閉まるギリギリに行ったときは「ごめんね」という感情があった。卵は少し傷つけるだけで割れてしまうし、子どもの柔らかい肌も傷つけてしまいます。たった1週間でも大変でした。本物の子どもなら……と考えると、親になるってすごく勇気のいることじゃないだろうかと本気で考えてしまいました。

(保育士)

今回の育児で私は保育士だったので、育児はできなかつたけれど、育児をしている親のいろいろな思いを感じることができました。幼児が歩けるようになったとか、本当に嬉しそうでした。卵を持ってくるとき本当に心配そうにしていた人もいました。私も割れやしないかと心配でした。

実際生きていない卵の世話でも本当の子どものように大切にして、親って言う仕事はどの仕事よりもかなしく、大変なんだと思いました。

(お母さん)

私は卵の育児で、たいへんだなあということと、大事にしないといけないなあと思いました。1番大変だったのが保育所に行って帰ってが大変でした。それは行く時間も決まっているし、帰る時間も決まっているからです。だから本当の子どもになると大変だと思う。自分の親はよくやったなあと思いました。

本当の子どもを育てるには、体力と優しさが必要だと思いました。

(お母さん)

私は最初、「たまごの育児なんて簡単だからまあいいや。」とっていました。でも、たった1週間というすごく短い期間だったのに、大変でした。「たまごがわれないだろうか。」とか気をつけたり、1日2回の送り迎えや日記など忙しかったです。もしこれが本当のおかちゃんなら、オムツを換えたりご飯を食べさせたり、本当に泣いたりします。卵とは比べ物になりません。私もそんな風に育ったのだと思います。

お母さんやお父さんに感謝したいです。

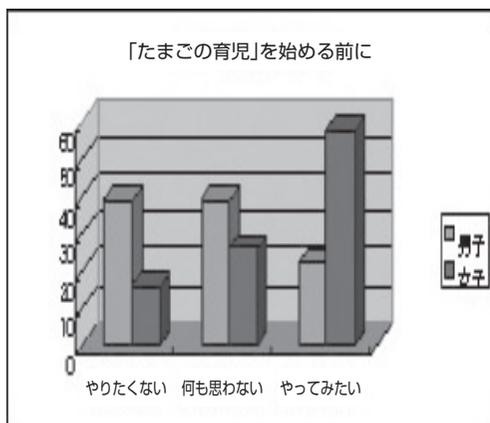
ケ たまご（あかちゃん）を永久保存する

育児体験が終わってから、次の授業でたまごを洗浄してボンドを詰める作業を行う。たまごの底に1cm程の穴を丁寧に開け、そこから中の物をつま楊枝で取り出し、水道の水圧を利用して洗浄する。ペアでの作業であったが、本当に恐る恐るの作業をしていて、男子がひびを付けたりなどしたら、女子が本気で怒っており、まるで夫婦喧嘩のようであった。数分でできる作業であったが、予想以上に時間がかかった。内容物を取り出したのでたまごの重量と同じほどボンドを50g注入して逆さまにして固めた。

4 事後アンケート結果と考察

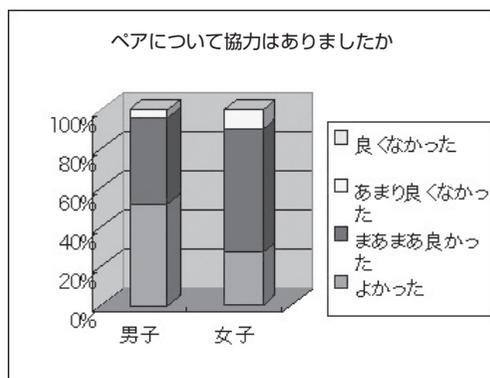
対象……2年生

ア 「たまごの育児」をはじめるときにどのように感じたか(%)



「たまごの育児」を始める前は男女による興味・関心の度合い差が大きいことがわかる。前年度の生徒が行ったたまご（子ども）を家庭科室に展示していたので、女子の多くは自分たちも来年はやりたいと興味を持っていたようである。

イ ペアについて協力はありましたか (%)



ペアの協力性について、男子は女子に対して比較的良い評価であった。理由としては [男子から女子の評価]

- 交互に協力してできた
- 一緒に毎日送り迎えをしてくれた
- 7割以上面倒を見てくれた
- 母親としてしっかりやってくれた
- 責任を持って育ててくれた
- しっかりものでよかった

[女子から男子の評価]

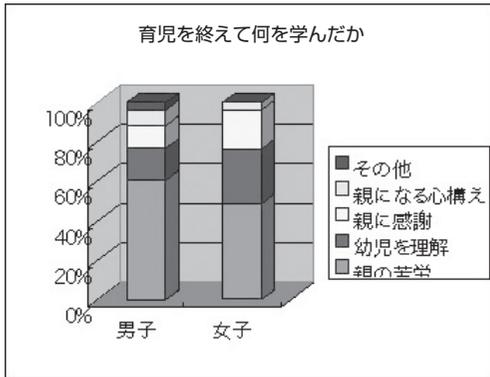
- 交互にちゃんと仕事をしてくれた
- すごく楽しかった
- よくやってくれた
- やることの半分くらいしかやってくれない
- 日誌を書いてくれなかった
- たまごを割った

女子からの評価も大体良い評価ではあったが、育児をサボったお父さん役に対して不満があった。

男子が協力的でない女子が

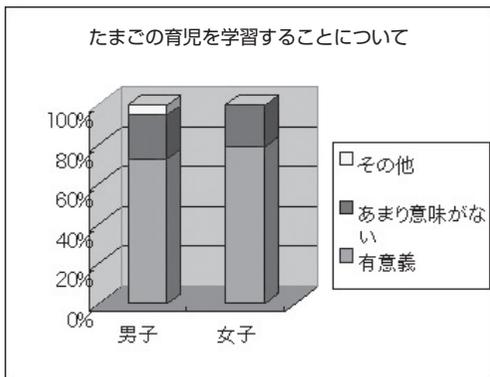
「今日は彼の当番なんだけどきっと忘れて迎えに来ないように思うから来てみた。」と心配な顔で迎えに来た。

ウ 「たまごの育児」を終えて何を学んだか (%)



たった1週間ではありながら学習（仕事）と育児の両立が大変であったため、自分の親の苦勞が理解でき、親への感謝の気持ちが育っていったと考えられる。

エ 「たまごの育児」を家庭科の授業で学習することについてどのように思うか (%)



5 成果と課題

たまごを男女ペアのあかちゃんとして送迎させることの利点としては、たまごは生であり、少しの衝撃でも壊れたり傷ついたりしてしまうことである。そのため生徒は送迎の途中や保育所に預けに来るときなど、細心の注意を払っていた。

また、不可抗力で壊れたり、ちょっとした不注意で壊してしまった子どもたちは、ただ単に調理に使う卵としてではなく、「命あるたまご」として感じており、実際の子育ての場面では親のちょっとした不注意で、子どもが命を落としてしまう危険性を知ることができた。男子が壊してしまった時に、女の子に随分優しい言葉で「ごめんね」と繰り返していたのが印象的であった。職員室の他の教師もその姿に驚いていた。

育児日誌を記入しながら、「3ヶ月ではどのような行動をするのだろうか。」と教科書で調べたり、親や祖父母に自分の幼い頃の話や様子を尋ねながら記入した生徒もあった。「お母さんに聞いたら私は小さいときよだれをいっぱいして、よそ行きの洋服を汚してたんだって。」と楽しそうに話してくれた。このように、保育日誌を書くことで、従前の学習内容が復習できたり、家族や自分を取り巻くまわりの人々との交流ができる。

ペアについては、予想に反して男子も大変協力的であった。いつも男女で送迎していたペアや、男子が都合のつかない日には女子が迎えにきたりと、お互いの状況に応じて協力していた。たまごの送迎用に製作したキャリアバックも育児が進むごとに、かわいらしく飾りつけがされて、布団や枕まで手作りするほど愛着がわいてきた生徒もあった。育児期間が終了して、たまごを保存する為の作業も細心の注意を払って、たまごに穴を空けていた。現在、この育児は終わったのだが、被服室に家庭科の授業に来るたびに保育所のベビーベッドに寝かせている「我が子」を覗きこんでいる。

削減された授業時数を考えると、この学習には1週間の期間を有するが、家庭科の授業は2時間しか消化せずに取り組むことができる。事後アンケートの結果からも解るように、事前にはたまごの送迎の煩わしさから面倒であると感じていた生徒も、育児が進むにした

がってたまごが我が子のようにかわいく感じ始めていた。この教材は「命の尊さ」を学び、子どもの成長や家族、男女の協力について学習するには有効な教材である。親への感謝の心を自然な形で気づくことができ、自分と家族や家庭生活とのかかわりについて考えさせ、自分の成長や生活は、家族やそれにかかわる人々に支えられてきたことに気づくことができる教材といえる。

〈参考文献〉

新共学家庭科の理論	光生館
中学校学習指導要領	文部科学省